

~~~~~

研究集会 「両極海における砕氷船を利用した観測研究」

日時：2014年10月27日（月）

場所：北海道大学低温科学研究所 2F 講義室

開催趣旨：

近年、北極海および南極海では温暖化や海氷減少、海洋酸性化といった確実な変化が観測されており、その環境監視域としての重要性は論を待たない。現在、GRENE・JAREといった各々の海域における大型研究プロジェクトが遂行され、日本の極域研究への注目度はかつてない高まりを見せている。このような背景の中、最近では研究砕氷船の建造が議論されはじめている。極域海洋研究の将来的な発展には、依然として未解明な部分が多い両極海の氷海域における研究砕氷船の効果的な運用が鍵となる。本研究集会では、分野・手法・プラットフォームに共通項を多く持つ両極海の研究者の相互理解と、各々の研究プランの研鑽と将来の研究課題への発展を目的として、両極海の研究者による建造後を想定した両極域における砕氷船運用とそのベースになる研究プランを中心に議論を行う。

プログラム：

13:00-13:10 趣旨説明 溝端浩平(海洋大)

セッション1：古気候の再現～海氷予測

13:10-13:40 高橋孝三(北星学園大)

「北極海多年氷域における砕氷船ビダール・ビキング、オーデン、ソビエツキー・ソユーズ3船体制砕氷全容とIODP Exp. 302 深海掘削の成果」

13:40-14:10 山口一(東大新領域)

「北極航路研究に必要な砕氷観測船機能について」

14:10-14:40 山本正伸(北大院地球環境)

「アラオンによる海底堆積物研究と海底地形調査から学ぶこと」

14:40-14:55 (休憩)

セッション2：海氷-海洋-海洋生態系変動観測

14:55-15:15 館山一孝(北見工大)

「各国の砕氷船を利用した観測例」

15:15-15:35 三瓶真(広島大)

「カナダの砕氷船を用いた海洋生態系研究の紹介ーアムンゼン号の研究体制などー」

15:35-15:55 田村岳史（極地研）

「豪州砕氷船での海水物理・生態系共同観測の様子」

15:55-16:15 野村大樹（北大低温研）

「独観測砕氷船ポーラーシュテルンによる厳冬期南極航海」

16:15-16:30 （休憩）

16:30-17:30 総合討論（進行：溝端）

18:00～ 懇親会

~~~~~